

広告

これからの防災のカギは、
自助・共助・公助の連携。

京藤 敏達さん(筑波大学教授)



リバーカウンセラー※として、昨年の震災後、利根川下流などを視察しました。そこでわかったのは、外側からは見えない堤防の内部に亀裂や空洞が発生している可能性があるということでした。洪水などで川の水かさが増した場合、このような亀裂・空洞に水がしみこむことで堤防が弱くなり、最悪の場合決壊する原因にもなりえますが、外から確認できないため、事前に対処することは困難です。昨年は幸い何事もありませんでしたが、昨年以上の洪水が起こる可能性もあり、安心はできません。

しかしながら、利根川の堤防は河口から取手市付近までの下流部だけでも、左右両岸あわせておよそ160kmあり、その全てを常時監視して、漏水などの異常を直ちに発見するというのを公共機関のみで行うのは、人員およびコストの面からいっても不可能です。また、千年に一度というレベルの災害が実際に起こりうるということが東日本大震災で明らかになりましたが、そのレベルの水害にハード的に備えることは困難です。

そこで重要になるのが、

- 地域住民一人一人が洪水被害に備える「自助」
- 地域全体で協力して防災に取り組む「共助」
- 公共機関が行う情報提供や災害対策の「公助」

これら3つの取り組みを連携させることです。

自分自身の生命・財産を守るためにも、「みんなで見守る」ことが大切なのです。

※国土交通省では、全国の一級河川を対象として、それぞれの川に詳しい学識経験者から河川管理の改善のためのアドバイスを受けています。そのアドバイザーの方を「リバーカウンセラー」といいます。

地域で「共助」を育てていくことが大切。

南青山自治会防災会(我孫子市)



平成18(2006)年に発足して以来、地域の防災意識、「共助」の一層の向上を目指し、様々な防災活動や啓発等を行っています。毎年秋には、避難所となっている小学校を会場として近隣の5つの自治会と合同で防災訓練を実施しています。このように5つもの自治会との合同の訓練は、市内でも画期的なものと聞いています。内容としては、「M7の茨城県南部地震により全市で被害が発生」の想定のもと、安否確認・避難訓練、情報収集・伝達訓練、AED講習などを実施しています。また、自治会・防災会の活動として、防災訓練の講習への参加のほか月に1回、施設の不備などを見て回るパトロールを行っています。



防災訓練のようす

南青山地区は約450世帯。市内は高齢化が進んでいるのに対し、サラリーマンや共働きの若い世帯が多い新興住宅街という特徴があります。仕事や生活に忙しい方が多く、なかなか地域の防災活動に参加しなくてもできない状況が悩みですが、夏のお祭りなどの行事を通じて、広がりつつあるところです。

これを励みに今後も地道に活動をし続け、有事の際にお互いに助け合える地域をつくらせていきたいと思えます。

※くわしいインタビュー記事を利根川下流河川事務所のホームページで紹介しています。下記アドレスからご覧ください。

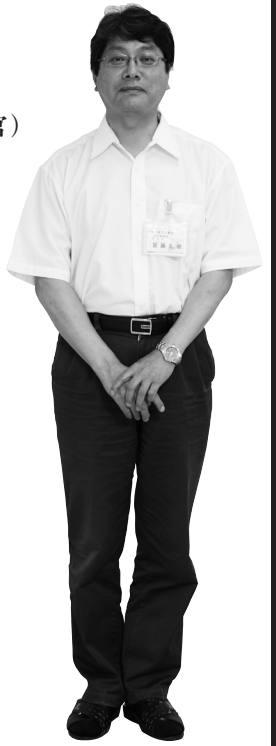
今年も来ます！
大雨・台風シーズン
洪水に
みんな
みんなで
守る
利根川下流
備える！



昭和56年の小貝川決壊の様子(茨城県龍ヶ崎市高須地先)

警報や注意報は、「危険」を知らせるサイン。

首藤 克哉さん(銚子地方気象台 防災業務課 調査官)



大雨・台風シーズンにあたって、みなさんにお伝えしたいのは、気象庁や地元気象台が発表する警報、注意報など、正確な最新情報を入力して頂きたいということです。

正確な、と申し上げたのは、たとえば注意報と聞くと、それほど危機感を感じない方もいらっしゃるのではないのでしょうか。でもこれは、「何かしら注意が必要ですよ」というのを伝えているもの。「あなたは今、危険な場所にいるんですよ」というサインなんです。

人間誰でも、自分だけは大丈夫とつい考えてしまい、目の前に危険が迫ってくるまで行動しない傾向があります。しかし、これまで災害が起こっていないからといって、これからも起こらないとは限りません。昨年、紀伊半島を襲った台風第12号クラスの豪雨が利根川流域に降ったら、大きい被害が発生するおそれは十分考えられます。

ですから、ふだんから気象情報を入力する習慣を身につけてほしいと思います。いつも見ていれば危険の度合いを判断することができますし、避難のタイミングを自分ではかれるようになり、命を守ることに繋がります。

●気象庁のホームページでも情報を入力できます。ぜひごらん下さい。
→http://www.jma.go.jp/

体験で実感、
被災直後は自助。

植竹 勇さん(龍ヶ崎市高須町在住)



昭和56(1981)年8月の小貝川決壊で自宅が被災しました。夜中の突然の決壊で、消防自動車からサイレンとともに、「堤防が決壊しました。大至急避難して下さい」というアナウンスが流れたものの、どこが切れて、どれくらいの水位で、どのくらいの水が来るのかも分からず、両親と「とにかく物を全部2階へ上げよう」と、朝までかかって上げました。同時に3~4日は助けには来てもらえないだろうと、風呂桶を洗って水をため、バケツやタライに水を張り、電気も止まるだろうと判断して炊飯器でご飯を炊き、いたまないように梅干しを入れた塩つけむすびを作ったのです。

私たちが住んでいる高須地区は、昭和10(1935)年にも大きな洪水に遭っています。ですから、盛り土してから蔵を建て米や大事なものを貯蔵したり、家の軒先に舟を縛り付けている家もありました。そうした土地柄でしたから、当時は防災無線も、具体的な情報提供もなかったのですが、2階に物を上げたり、当座の水や食べ物を即座に確保したりできたのかもかもしれません。

油断は禁物!!

東日本大震災で被災した災害復旧は、5月末にほぼ完了する予定です。

でも、ここで紹介したみなさんのお話にもあったように、復旧が完了したからといって油断は禁物です。今年もやってくる大雨・台風シーズンに備えて、日頃から洪水ハザードマップ※や各種の情報をチェックしてください。



千葉県香取市佐原地先の災害復旧状況

※洪水ハザードマップとは、洪水時に予想される浸水区域などを示した図です。くわしくは自治体ホームページや国土交通省の「ハザードマップポータルサイト」→http://disaportal.gsi.go.jpなどをご確認下さい。

